

ベトナム中部フエ省における草木染めの試みと その生計手段的可能性に関する調査

小川 遥

キーワード：草木染め、ベトナム、フエ省、植物、染色、ハンドクラフト、潜在性、小規模、副収入

1. はじめに

ベトナムは、南北に細長く起伏にとんだ独特の地形と熱帯性の気候から、約 13200 種もの植物が見られる国であり¹、昔から人々の日常生活において草から木本に至るまで幅広く利用されてきた。2010 年度に実施したインターン研修では、植物と住民の暮らしとの関係及び利用法に関する調査をし、医と食のみならず、独自の用途や植物の特徴を生かした多様な利用法があることが確認できた。そのことから、周辺植物は住民にとって身近に、かつ多様に利用できる資源であることが分かり、あまり知られていない少数の用途や日常生活で利用できる他の可能性がそこにはあるのではないかと推察した。そこで、今回着目したものが、草木染めである。日本では知名度が高い草木染めだが、ベトナム、特に中部トゥアティエン＝フエ省では草木染めに関する研究は少ないのが現状である。更に、フエ省は、生活困窮者層に対するアプローチが必要とされるような地域社会問題も抱えている。そこで本研究では、草木染めの実態把握とともに、現地植物による染色実験、及びその結果に対する評価の調査から、草木染めの実行可能性と潜在性を検証し、生計手段として展開できる可能性を考察することとした。

2. 調査方法

2010 年 9 月 12 日～11 月 26 日に植物の用途調査を行い、2011 年 8 月 15 日～2011 年 11 月 5 日に草木染めに関する調査と実験を行った。2011 年の調査では、主に山間部村落の少数民族に対して、草木染めに関する聞き取りをし、また、複数の調査地から採集した 25 種の植物で、シルクとコットンの染色実験による発色の確認をした。更に、実験結果から選んだ植物と染色法で 20 色のシルクスカーフを作成し、ハンドクラフトとしての評価調査を、市内の手工芸品生産者に対しておこなった。

3. 結果

少数民族の草木染めに関しては、1 種類の植物に関する染色が過去に行われていたが、ベトナム戦争や合成染料の普及、高齢化による影響で現在ではほぼ廃れていることが分かった。次に、実験により、日常道具と身近な植物で染色できることが確認でき、主に黄色、茶色、灰色、そしてピンク系統の多様な色が得られた。最後に、ベトナムの手工芸品制作者から見たシルクスカーフに関する調査では、概ね高評価であり、草木染めのハンドクラフトには、特に外国人観光客を対象とした土産になりえるというように商品としての価値も考えられた。

4. まとめ

植物の染料としての一般的な認知度は低かったが、トゥアティエン＝フエ省における、身近な植物材料と家庭用品を利用した日常生活の中での草木染めの実現性、そしてそれを利用したハンドクラフトには商品としての価値をみる事ができた。一方で、草木染めはその性質上、再現性が求められる商品や大量生産には向かないことが考えられる。今後、特定の地域への導入を考える場合は、より詳細な地域の植生調査、生活環境や暮らしの実態把握などの調査、そして消費者側からみたハンドクラフトに関する嗜好を知ることが必要であるが、今回の研究を通して、フエ省における草木染めは、染料という植物の新たな利用法、そして家で行うような小規模な副収入の手段につながる可能性があることが確認できた。

¹ Ministry Of natural resources And Environment, Vietnam Environment Administration. (2008). “Vietnam’s Implementation Of The Biodiversity Conservation.” 4th Country Report.

(オンライン 入手先) <http://www.cbd.int/doc/world/vn/vn-nr-04-en.pdf> (参照 2012/1/16)